

名古屋『雅風教会規約』にみる教導職制度の影響

富田 和子

はじめに

京阪地方の笠付（冠句）も、東海地方の狂俳も、その発生をみた江戸時代に続いて明治期も盛んに楽しまれ、種々な雑誌が発行された。一方、関東地方でも、明治二十一（一八八八）年十月、東京で、「清警冠句」と角書する「桑弧集」初編が刊行された。これは、それまで行われていた五文字の題に十二音を付け、句末の止め方に制約のない「冠句」よりも、字数に制限のない題に十二音を付け、句末を用言の終止形で止めるなどの制約の多い「狂俳」形式に近い「冠句」で、「清警冠句」として行われるようになったものである。

その二編（明治二十一年十二月刊）に、桑弧社名誉社員・講師の若葉家志計留による「作例一斑」が掲げられた。その中で、句作上、「目下必要を感じる作例五則を抄出し」と、特に注意すべき次の五点をあげ、新しい時代にふさわしい冠句の作法を述べている。

第一 用字の例 及び其算法

きまり

かぞへかた

第二 雑題ざうだいの句に。季候きこう又は節物せつぶつを用ゆるの例

第三 句に典故てんこを用ゆるの例

第四 方言ほうげんを用ゆるの例

第五 西洋言語を用ゆるの例

いずれも言葉に関するもので、明治の文明開化期における言葉への関心の高さと扱い方の難しさが窺える。

当時、このような作法や入門書は、川柳風狂句でも、七世川柳が校閲する『初心必読狂句虎の巻』（遠来舎友得著、篠田久次郎編 滑稽堂 明十六）があり、俳諧では、正岡子規の有名な俳論書「俳諧大要」（明二十八）、それ以前に子規が「癩祭書屋俳話」で批評した撫松庵兔裘の『俳諧麓迺栞』（同楽堂 明二十五）や、其角堂機一の『発句作法指南』（頼才新誌社 同年）があり、また、和歌でも佐佐木信綱の『歌のしをり』（博文館 同年）や一事庵史栞編『発句独稽古』（弘文堂 同年）など、多くの作法書、俳論・歌論書がまとめられていく。若葉家志計留による「清警冠句」の作法書がどのような形で刊行されたかははっきりしないが、このような時代の流れの中で、冠句にも新しい時代にあふわしい作法書が求められていたのである。

これらの動きは、おそらく明治五年に、政府の国民教化政策によって導入された教導職の制度が、大きく影響したのではないかと推測される。それは、桑弧社との交流があつた名古屋の狂俳結社である清原社の規約集から窺える。

そこで、「桑弧集」とその二編所収「作例一斑」については、既にそれぞれ別稿で述べたので、本稿では、まず、教導職について確認し、雅風教会清原社の発足と分裂を考察し、その規約集『雅風教会規約』を検討したい。

『雅風教会規約』は、①俳諧単句改良緒言（以下「改良緒言」と略称）・②雅風教会結成願（以下「結成願」と略称）・

◎教会規約（十六条）・①入社規則（二十三項）で構成される。

なお、本稿の○付き英数字と傍点は、末尾に載せた規約集『雅風教会規約』の翻刻に、恣意に施したもので、引用の該当箇所を示す。

一 教導職

まず、教導職について確認しておきたい。朝倉治彦編『明治官制辞典』（東京堂出版 一九六九年初版・一九八七年再版）によれば、次のように解説される。傍点・「」などは、富田による。

政府の国民教化政策によつて、教部省に設置された職。五年（一八七二）三月十四日神祇省を廢して教部省を設置し、四月二十五日、従前の宣教使を廢して、教導職を設け、その等級を十四級とした。即ち、正・権大教正、正・権中教正、正・権少教正、正・権大講義、正・権中講義、正・権少講義、正・権訓導（大教正以下俸給なし。一級は官等二等に准ず、以下これに倣う）。（中略）また大教宣布の一手段として、府下のおもな富士講の先達すなわち浅草の山中宗七ら数名の者に教師試補の辞令を授与し、俳諧師にして、試補に任命されたものもあり、さらに俳優・講談師など一技一芸の教化に役立つと考えられる者をも加えんとする議起こり、六年二月十日、地方民間有志を補うべきにより、各地方官へ、その推薦を達し、さらに落語家・売卜者・講談師（たとえば中講義三遊亭円朝）・河原者（たとえば大講義市川団十郎）・戯作者などに迄範圍を拡張した。（中略）教導の内容は（中略）教則所謂「三条の教憲」を達して、これによらしめた。すなわち「第一条 敬神愛国ノ旨ヲ体スベキ事、第二条 天理人道ヲ明ニスベキ事、第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムベキ事」。（中略）十年一月十一日教部省は、廢

止され、(中略)、十七年八月十一日神仏教導職を全廃し、教団、各宗の運営は自治に委ね、住職の任免・教師の等級・進退などは神仏各管長に委任した(神道側は大教院廃止後神道事務局を設立した)。

つまり、教導職は、政府の国民教化政策によって、明治五年に設置された教部省に設けられた職で、同十年に教部省が廃止された後も、同十七年まで続けられた職である。主に神官や僧侶が任命されたが、他に俳諧師などで試補に任命されたものもいた。そして、教導の内容は、「三条の教憲」を基本とした。

これによれば、⑧「結成願」が提出された明治二十年八月には、すでに教部省はなく、教導職は廃止されており、住職の任免・教師の等級・進退などは神仏の各管長に委任されていた。そのため、⑧「結成願」は、これに「神道管長従四位 稲葉正邦殿」^③とあるように、教派神道の一派としての神道本局管長 稲葉正邦宛に提出され、第三二二号で認可されたのである。

また、通賀と其風は⑧「結成願」に「訓導(傍点部)」とあり、稚松・緑・虎友は⑨「教会規約」に「試補(傍点部)」とあるので、これを提出する以前に、既にそれぞれ教導職訓導又は同試補に任命されていたことが窺える。

二 雅風教会清原社の発足と分裂

明治十五年五月に「水の音」初編を発行し、名古屋の狂俳活動の中心的存在であった水音社に、同十八年頃、何か混乱があり、その後継を名告る清原社によって、同二十一年十月に「俳諧清原集」(松屋書店発行)が創刊したことは、既に別稿で述べた。^④そして、翌月興行した「年魚市知多、郡俳諧単句大番付会」という清原社の番付表が残る。^⑤更に、見返しに「俳諧清原集号外」とある『皇国俳人全摘集』(同二十三年一月)^⑥が残る。以上から、清原社は、名古屋だけでなく、

当初から知多地方にも勢力をもち、少なくとも同二十三年一月までは続いたものである。

そして、清原社は、⑧「結成願」から、「雅風教会清原社」（以下「清原社」と略称）として、当初、既に教導職（訓導）に就いていた米園通賀（松井又左衛門）と涼川居其風（平出金七）の二人を中心に結成し、同二十年八月に教派神道の一派としての神道本局から認可されたものであることがわかる。更に、①「入社規則」十一項⑧に、「雅風教会所ハ熱田旗屋町米園宅ヲ以、当分仮本社ト定ム」とあり、熱田旗屋町（現在の名古屋市熱田区旗屋一丁目・二丁目）の米園宅に仮本社をおいたのであった。

また、①「入社規則」十七項⑬に、「当分の内、水の音^{ミヅノネ}、月次集^{グヰツシツ}、点料配当セズ、是ヲ積立置、教会所設置の資金ニスベキ事」とあり、清原社と「水の音」との関わりが窺える。そして、④「改良緒言」は、早速、「水の音」六四編（同二十年九月）の巻頭に掲載された。

この「清原社」発足の影響は、「水の音」六五編（同二十年十一月）から七三編（同二十二年一月）まで、通賀と其風の俳号前に「雅風教長」、貫々居一斎の俳号前に「雅風教括」が冠されたことに見てとれる。

なお、この通賀と其風、一斎の三名は、「清原集」初編の刊行と同じ月に刊行された東京の「桑弧集」初編で、客員点者をするほど、当時の名古屋の狂俳界を代表する点者であった。

ところで、見返しに「清原社月次集」と載り、「雅風教会所蔵版」とある「^{俳諧}水廻音」七二編（明治二十二年）・七三編（同年一月）が残る。^⑦おそらく七二編は一月上旬、七三編は一月下旬の刊行であろう。「清原集」初編に載った社告に、「旧水音社出版、水の音ハ編ヲ累ナル事七十有三編ニ至ル。実ニ近來稀ナル集冊タリ。然ルニ曩ニ雅風教会、取締ヲ被命タル当時、社名ヲ清原社ト改正シ、出版致来リ、俟^⑧処」とあったこれに該当すると思われる。おそらく「水の音」七二編・七三編は、七二編（同二十一年六月）に続いて、同二十一年七月・八月に刊行する予定であったものが、何

らかの理由で遅れたものであろう。

そして、これらは、非売品とあり、発行所の記載はない。表紙は茶色の文字を同色の枠で囲み、周囲に水色の流水紋を配した洒落たものになっている。それは、半年前に刊行された「水の音」七一編までが、「水音社月次集」であり、定価金四銭、梶原竹哉（淇水堂）発行で、表紙も誌名の文字を記しただけであったのとは大きく異なっている。

その後、これらは、七三編の米園序を欠くが、「清原社月次集」ではなく、「水音社月次集」として、定価金二十銭で、淇水堂発行の「水の音合本」（七一編〜七五編 無刊記）に、七二編・七三編としてそれぞれ収められた。

つまり、当時、「水の音」は七一編まで水音社の月次集として淇水堂から発行され、七二編・七三編は清原社月次集として「雅風教会所蔵版」で発行されたが、「水の音合本」（七一編〜七五編）では再び水音社月次集として淇水堂から発行されたのである。一方、「清原集」初編・二編は、「水の音」七二編の発行前に、清原社月次集として松屋書店から発行された。そして、「清原集」二編の柱刻に「ミ七十四」とあることから、当初、淇水堂ではなく、松屋書店から「水の音」七四編を発行する予定であったのであろう。しかし、人気の高かった「水の音」の発行を淇水堂が手放すはずもなく、七四編発行頃には、通賀・其風と和解したのであろう。彼らは水音社に復帰して「水の音」七四編を編集し、一方、梅楽と一斎は清原社に残ったと思われる。

この「水の音」七四編以降には「雅風教長」「雅風教括」の役職名は冠されなくなり、「清原集」の編者春日亭梅楽（長谷川嘉七）と『皇国俳人全摘集』の点者でもある一斎も、「水の音」で点者をしなくなる。一斎はこの後、同二十五年八月に愛知・岐阜の同志で組織した「皇国雅教会」を新たに発足させ、取締に就いているから、おそらく、七四編頃には、通賀・其風とは袂を分かったのであろう。

雅風教会を名告るようになってから一年ほどで、有力な点者たちの考え方に違いがでてきたと思われる。これは「水

の音」七二編・七三編の刊行が淇水堂から離れ、そして遅れた理由ではなからうか。

因みに、明治七年に結成された、東京のいわゆる旧派俳壇を統合してできた二大結社、俳諧教林盟社と俳諧明倫講社は、教導職が廃止されると、翌年、後者は神道芭蕉派明倫教会と改め、神道の一派となり、前者は神道大成教会所屬となつて、更に宗教色を強めていく。そのような傾向が、名古屋では問題にされたのかもしれない。

また、「清原集」初編では通賀・其風も点者をしており、二編は残念ながら落丁するのではつきりしないが、少なくとも其風は点者をする。この二人が淇水堂と和解できたのは、先の清原社の社告に、「今回社印及び集冊拡張之為、水の音集ヲ社名ノ如ク清原集と改正シ、(中略)第壹号トナシ發行仕候間、七十四編ノ続ト御心得ノ上」とあることに、淇水堂が驚いたためではないかと思われる。

三 『雅風教会規約』

既に、教導職の制度は廃止されているが、『雅風教会規約』をみると、教化精神を尊重する傾向が随所に窺える。

その他に、清原社では、「俳諧単句」「単句」(傍線部)と呼び、「狂俳」とは呼んでいないことがわかる。しかし、

④「改良緒言」に、①「僅カ十二文字ニ綴リ」とあり、更に、②「此単句濫觴ハ安永ノ頃、伊勢ノ国ニ樗良ト云フ俳人アリ。俳諧連句ノ趣意ヲ執リ、一派ノ風調ヲ興シ、愛知ノ名古屋ニ杖ヲ留メ、判撰セシヨリ、一百有余年、此地ニ流行シ、今、東海三、四州ニ蔓延シテ、山海ノ僻地、漁翁・耕夫モ嗜ザルナシ」と、樗良を始祖とし、東海地方に流行したものであると述べている。つまり、ここであいうところの「単句」は「狂俳」のことである。なお、「俳諧単句」の初出は、見ることできたものでは、「水の音」四一編(明治十八年十月)の角書からである。なぜ「狂俳」に変えて、

「冠句」ではなく、あらたに「単句」と呼んだのかについては、はっきりしないが、次項で述べたい。

さて、本書は、④「改良緒言」に続いて、⑤「結成願」・⑥「教会規約」・⑦「入社規則」が順に綴られる。

まず、この④「改良緒言」で述べるところの改良をめざすことは、④判者（点者）がいつそう研究勉勵につとめ、教師となつて⑤「正しき単句」、つまり、③風雅の楽しみへと導くことである。

次に、⑥「結成願」は、八月五日に申請して、十八日後の同月二十三日に認可されたことがわかる。また、通質と其風は、既に、教導職の訓導に任命されていたことが窺える。

そして、⑦「教会規約」の第一條に「三條御教憲の大旨ハ修身遵守スベキ事」と、教導職の教化精神として指示された三條教憲を掲げ、神や先祖を礼拝するなど、会の心得や運営方針、教長や判者の資格や行うべきことなど、十六條を挙げていく。

その中の第十二條に、判者になるためには単句の学才試験を受けた上で、奥書をつけて出願すること、そして、その但し書きに「智識ノ多少ニテ、判者・撰者・評者ト三級ニ順次ヲ備フ」とある。ここから、清原社では、単句の学才試験がおこなわれたことと、判者・撰者・評者の呼称の違いは階級の区分であることがわかった。

更に、⑧「入社規則」では、社員的心得や行うべきこと、会の細かな経営に関することなど二十三項をあげる。

例えば、⑥入社には社員一名の推薦が必要で、⑦入会金は一円。⑩月次興行の担当者（月行司）は抽籤で決める。

⑪社員は月次集に十五句以上投吟し、⑭二ヶ月投吟しないときは休社扱いとなる。⑫月次集の点者は二十名以内を原則とし、⑬客評は二名まで。⑮月次集の題は教長が出す。⑯投吟料は差句と同封するが、地方で不便な場合は郵便切手でもよい。⑰勉事は清原社関係の興行を盛り立て、⑱清書認方には相当の筆耕料を出す。

この中で、⑭「式ヶ月投吟無之者ハ休社トシテ、題紙の載名削除スベシ」、⑰「客評ハ式名宛、毎月、題紙二記載ス

ベシ」とあることから、引札（募集要項）のことを、既に「題紙」と呼んでいたことがわかる。なお、現代の尾張・三河・岐阜地区の狂俳結社でも「題紙」と呼んでいる。そして、⑬「月次集題ハ教長ニテ作スベシ」と規定しているから、教長である通賀と其風の二人が担当したことがわかる。

四 「正しき単句」

④「改良緒言」で述べるところの⑤「正しき単句」とは、どのようなものをさしているのだろうか。おそらく「正しき」という表現は明治の教化精神を反映してのものではあるうが、確認しておきたい。そこで、まず、「単句」について思うところを述べ、次に「正しき単句」について考察したい。

まず、前項で記したとおり、名古屋で「俳諧単句」と呼ぶようになったのは、教導職が廃止された翌年発行の「水の音」四一編（明治十八年十月）頃からである。この「単句」とは、④「改良緒言」でも①「僅カ十二文字ニ綴リ」と特徴をあげるから、おそらく「簡単で短い句」の意であろう。初句を冠に見立て、そこに置いた題に句を付けるという意の「冠句（笠付）」から、付句の「僅カ十二文字」を強く意識し、長句に対する「短句」と区別して、「単句」と呼んだのであろう。当時、水音社内部に何か混乱が起こっていたから、心機一転をねがい、「ただひとつの句」の意を込めて「単句」と呼んだのかもしれない。かつて、名古屋では、天保期に独自に俳諧性を強く意識して「狂俳冠句」と呼び、流行した歴史がある。後に、子規が俳諧の発句を「俳句」と呼んで小説・詩などと同列の文芸として新生をはかったように、再び新名称で他と区別して新時代に向けて新しさをアピールしようとしたのであろう。

次に、「正しき単句」とは、どのようなものをさしているのだろうか。

まず、④「改良緒言」で、「単句ナルモノハ月花ヲ玩ブ風流ノミニアラズ」と述べ、「単句」を学ぶことでさまざまな知識が得られるという利点とその根拠を説く。そして、愛好者には、村の公務を務める者が大勢いるが、東海地方に蔓延するほど大流行しているのだから、無学の者もいる。そのような者が独学するので弊風がある。それは、文字や仮名遣いを間違える、ひとりよがりな言葉をつかう、他を誹謗したり、政令に反対したりする句を作るといものである。そこで、この弊風を一掃するのが教導職点者（判者）の役目である。教導職点者は研究に励み、誤りを糾明して、指導にあたる。例えば、⑤「教会規約」第十四條に「政教ニ悖ル句作、了解シガタキ句意等ヲ質問シテ、其誤謬ヲ糺シ、妄評有マジキ事」と規定している。

次に、はじめに挙げた、狂俳形式に近い清警冠句は、世間の風潮にあわせ、新事物を冠句の素材に取り込むだけではなく、付句十二字で各自の感動を言い尽くすところの妙味が、新時代にふさわしいことが求められていた。同様に、名古屋の狂俳もその歴史からうかがえば、題と付句の間の付味に妙味があり、蕉風俳諧・俳論に刺激され、不断の新味追求をモットーとしたことは明らかである。⁽¹⁰⁾ゆえに、付味は、単句のもつとも重要な要素である。

そして、「水の音」初編から一六編（一三編・一五編は表紙落丁のため不明）までには、通賀・其風らが順に序を載せる。その中で芭蕉の「古池や」の句を慕う記事が散見するし、社名や誌名からも、また④「改良緒言」で、樗良を始祖とすると述べていることから、彼らは蕉風俳諧を意識していることがつきり窺える。

これらから、「僅カ十二文字」に感動を込めることを強調して「俳諧単句」という新用語を使い、新時代にアピールしようとした。そして、「正しき単句」とは、まず、文字や仮名遣いが正しく、万人が理解でき、共感を呼ぶものであろう。誰もがこれを嗜み、付味を工夫する行為の中で、新しい時代の社会生活に必要な教養を学び、学問する助けになるものである。まさに、明治政府の国民教化政策に乗じて、勢力拡大を願った言葉であらう。

まとめ

東海地方では、まず岡崎で、明治八年頃から、文明開化の風潮を取込んだ撰集、令雅撰『狂俳眠りざまし』、東陵撰『この花集』と『類題花の魁』の継続発行が始まったことは、既に別稿で述べた。^①中でも『眠りざまし』五編の序では、明治七年に神宮祭主となった教導職の三條西季知（一八一―一八八〇）と覚静による「十二箇月の称の事」（暦が太陽暦へ移行したことで生じた十二ヶ月の四季の配当に関する記事）を引用するなど、新しい時代の風潮を取り込むことに意欲を見せていた。

そして、少し遅れるが、名古屋でも、「三條御教憲」を掲げる清原社の『雅風教会規約』が残ることから、明治維新直後の民心収攬のためにできた全国的組織である教導職の制度が、教部省の廃止後も地方に根付いていたこと、そして、名古屋の冠句（狂俳）の結社である清原社設立に大きく影響していたことが窺えた。

また、東京の桑弧社と、名古屋の通賀と其風・一斎、岡崎の蚊雷居らは交流があること、「桑弧集」二編の「作例一斑」で新しい時代にふさわしい冠句の作法を述べていること、桑弧集にも点者に役職名の記載があることから、教導職制度の影響は、俳壇だけではなく、東京の冠句壇にも浸透していたと思われる。

なお、学才試験の内容や判者・撰者・評者の区分がいつ頃から行われ、いつまで続いたのか。また、それらが清原社以外でも通用したものかどうかなどについて、今のところはつきりしないので調査を続けたい。

【付】 翻刻 名古屋 狂俳『雅風教会規約』

【凡例】

引用に際し、読解の便をはかり、漢字は通行字体に改め、句読点・濁点を施した。ただし、底本にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。() 付きルビ・○付き英数字・傍点・傍線は恣意に施し、○付き英数字以下は、本稿中の引用箇所該当する。

丁付は、各丁表裏の最終行が、段落末にあたるときのみ() に入れて記載し、文の途中にあたるときは省略した。次に、簡潔に書誌を述べれば、次のとおりである。

楮紙共表紙、書き題簽。左上に朱で「市楽君」と書き入れあり。縦十七・七×横十二・二(糎)、一冊。表紙共全十五丁。

本文、楮紙袋綴、墨付き十三丁〔内、俳諧単句改良緒言 三丁半・雅風教会結成願 一丁・教会規約 五丁・入社規則 四丁〕。

内容、雅風教会清原社の規約集。俳諧単句改良緒言・雅風教会結成願・教会規約(十六条)・入社規則(二十三項)で構成される。「結成願」は、神道管長 稲葉正邦宛に提出されたもので、十八日後に認可された。米園通賀(松井又左衛門)・涼川居其風(平出金七)(以上、雅風教会教長 教導職訓導)、子日庵稚松・千代廼家緑・幽溪舎虎友(以上、雅風教会勉事 教導職試補)の点者名と神道管長 稲葉正邦の名が載る。

初めに綴られた「改良緒言」は、「水の音」六十四編(明治二十年九月)の巻頭に掲載された。

刊記なし。「改良緒言」他に、明治二十年八月の記載あり。

架蔵。

【翻刻】

雅風教会規約

清原社

市楽君（朱の書入れ）

「（表紙）」

①俳諧単句改良緒言

文明の聖代、人民拏ゲ、文学ニ競フノ折柄、市街村落ニ諸種の学校設ケ有ト雖モ、学齡超過シタル農工商ノ者ハ、我活業ニ従事シテ読書・物理・考究スルノ余暇少ナシ。何ヲ以テ歟、智識ヲ開カン。幸ニ俳諧単句アリテ、聊其幼年ノ学欠ヲ補フベキ也。抑此単句ナルモノハ月花ヲ玩ブ風流ノミニアラズ。勸善懲惡ヲ基トシテ、皇國ノ物産^{地理・朱の書込み}ヲ初、神祇ノ祭典、覽^{みる}ニ天象・地儀・草木・禽獸・魚貝・虫・器財・衣食住ノ名詞、季候等ヲ弁ヘ、人倫貴賤ノ言語・情態、土地ノ風俗・俚諺・方言ニ至ルマデ熟知シ、喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲ノ七情ヲ①僅カ十二文字ニ綴リ、加之、万国ノ形勢ヲモ概略發明スル、実ニ方今、里俗、晩年ノ簡易文字ト言ハン。然リト雖モ森羅万象ナレバ、九牛ガ一毛ナリ、②此単句濫觴ハ安永ノ頃、伊勢ノ国ニ橋良ト云フ俳人アリ。俳諧連句ノ趣意ヲ執リ、一派ノ風調ヲ興シ、愛知ノ名古屋ニ杖ヲ留メ、判撰セシヨリ、一百有余年、此地ニ流行シ、今、東海・三・四州ニ蔓延シテ、山海ノ僻地、漁翁・耕夫モ嗜ザルナシ。其所以ハ、平談俗語ヲ交ヘ、耳ニ入易ク、口ニ述易クシテ、其意又至ラザル処ナシ。且其中ニ③風雅ノ樂ミ在バナリ。村落ニ於テモ公私ノ事務ニ關係シテ、世用ヲ達スル者、概ね此単句嗜メリ。然ハアレ共、此単句弊風トシテ教師ヲ以テセザレバ、誤謬多ク、大イニ人智ニ害ヲ醸スアリ。第一文字ヲ誤リ、仮名ヲ違ヘ、雅俗ニモ無キ詞ニ言出シ、良モスレバ他ヲ誹謗シ、素トヨリ無学ノ者モアレバ、無心ハ勿論ナガラ、恐多クモ政令ニ反對スル句作等モ邂逅相見エタリ。歎ク可ク愧^はズ可キノ極メナリ。④此弊ヲ一洗スルハ皆判者ノ務ニアリ。因テ百事改良の際ナレバ判撰ス

ル者、研究勉勵シテ、是ノ誤ヲ糺シ、⑤正シ、キ、単句トナレバ無學ノ父兄ノ身ヲ顧ミ、子弟ヲ責テ自然不就學ナク、愈學事盛大ニ至リ、開化ノ域ニ進歩シ、内外ニ恥ザルヲ得ンコトヲ庶幾スルモノナリ。

明治二十年八月 判者取締 米園通賀

同 涼川居其風

「(三丁オ)

⑧雅風教会結成願

今般教規第十二章の旨趣ヲ遵奉シ、「雅風教会清原社」ト称シ、別紙規約ニ拠リ、広ク信徒ヲ結成、教義拡張仕度候間、御認可被成下度、此段奉願候也。

愛知県尾張国愛知郡熱田旗屋町六十七番地

訓導 松井又左衛門 印

俳名 米園通賀

同 名古屋区桑名町六十五番戸

訓導 平出金七 印

俳名 涼川居其風

明治二十年八月五日

「(四丁オ)

神道管長從四位 稲葉正邦殿

第三百二拾貳号

割印 書面願之趣聞届候事

明治二十年八月廿三日

神道管長 稲葉正邦印

「後ろから四行朱書き（四丁ウ）」

◎教会規約

第一條

一 三條御教憲の大旨ハ修身遵守スベキ事

第二條

一 毎朝盥嗽シテ神道教規主神産土神ヲ拝シ、次ニ先祖の靈舎を拝スベキ事

第三條

一 神德皇恩ハ広大無量ナリ。其万分一ヲ報シ奉ラント欲シ、言行実積ヲ竭クスベキ事

第四條

一 異端邪説ニ惑溺スベカラザル事

第五條

一 会中ニ列セント欲スル者アレバ、先此條約ヲ守ルベキ旨ヲ誓約セシムベキ事

第六條

一 会中諸務ハ端正篤実ノ人ヲ撰任スベキ事

第七條

一 宣教ノ義は会場ノ便宜ニ從ヒ、營業ノ余暇ヲ量リ、其定日ヲ増減シ、凡テ生産進興ノ防害ナキヲ専務トスベキ事

「（六丁オ）」

第八條

一 会中ノ子弟、其父兄の教誨ヲ受ズ、言行道^(みち)ニ背ク者アレバ、懇諭懲戒スベキ事

第九條

一 会中申合ヲ以、適宜ニ出金、教会及吉凶禍福・疾病ノ入費ニ備へ、公私ノ急務ヲ救護スベキ事

第十條

一 教長ハ愛知県内、単句判者取締タル事

第十一條

一 単句撰判スル者ハ教導職ヲ拝命シテ、判者ノ許可ヲ受ベキ事

第十二條

一 判者ノ許可ヲ得ント欲スル者ハ取締ニ而、単句ノ学才試験ノ上、奥書ヲ以、出願ニ及ブベキ事
但、智識ノ多少ニテ、判者・撰者・評者ト三級ニ順次ヲ備フ

第十三條

一 教導職拝命ノ上、単句判者ノ許可受ルニ於テハ、実直ニシテ不品行の挙動有マジキ事

第十四條

一 年始年賀の祝ニ、或ハ俳名披露ノ単句卷等、判者の許可得ザル者、撰判致度時ハ、許可判者一名加撰ヲ備へ、政教ニ悖ル句作、了解シガタキ句意等ヲ質問シテ、其誤謬ヲ糺シ、妄評有マジキ事

第十五條

一 市街村落ニ於テ、研究ノ為、各撰卷興行スルモ、許可判者一名ハ必差加フベキ事

其卷ニ關係スル許可判者ハ、開席・集会へ必礼服ニテ出頭シ、説教、^(お上)暨ビ、単句ノ原祖、我日ノ本ノ国風・道德・情ヲ演論シ、醜業ヲ堅ク禁止シ、諸事善良ニ至ル指揮スベキ事

第十六條

一 教導職並判者、許可得ズシテ判撰致シ、猥ニ俳号・標札掲クベカラザル事

明治二十年八月

雅風教清原社教長

訓導 米園通賀

同

訓導 涼川居其風

同 勉事

試補、 子日庵稚松

同

試補、 千代廼家緑

同

試補、 幽溪舎虎友

①入社規則

一 社員親睦ヲ宗トシテ永続ヲ計ルベシ

一 社員の中、醜態有之時ハ隔心ナク諫言スベシ

「(九丁オ)

「(九丁ウ)

一 森羅万象ヲ探題ニシテ事物の原祖・来歴ヲ伺ヒ、不審の廉々会席へ申出、相互ニ研究スベシ

「(十丁オ)

附 諸卷見聞の句意解シガタキモ、同様衆議シテ明ラムベシ

一 通常の議事ハ集会の節、衆議決定可致ニ付、欠席の族、後日違背有之間敷事

一 臨時急務有之節は教長ニテ取斗ヒ可申事

一 ⑥入社望の者ハ社則熟覧の上、社中の内、一名、証人相立、証書差入可申事

一 入社員有之節ハ、本人、住所・姓名等、取調、勉事ヨリ社中一統へ報告シ、故障有之者、之ヲ遮断ス

一 ⑦入社員は補助金、弔差出し可申事

一 教長ハ社員勉強成功の者の教導職拜命、許可判者の願書推挙スベシ

一 不品行ニシテ政府の罰則ニ触、政庁ヲ煩ハシ、終ニ本籍ヲ穢ス者ハ断然之ヲ損社ス

一 ⑧雅風教会所ハ熱田旗屋町米園宅ヲ以、当分仮本社ト定ム

一 ⑨勉事ハ暫、社ニ関係スル卷ニ注意し、盛大を計ルベシ

「(十一丁ウ)

一 ⑩月行司ハ社員一統抽籤シテ巡番ヲ定メ、其月事務担当スベシ

但、遠方の者、従事不行届節ハ、便理の社員へ依頼スベシ

一 ⑪月次集社員は拾五句已上投吟スベシ

一 投吟難出来事、故有之ハ、行司又ハ勉事へ報知スベシ。尤其月撰ヲ省キ可申事

「(十二丁オ)

一 ⑫月次集撰者ハ二十名ヲ以限リトス

但、余名ハ月々繰替撰卷の事。尤集句ニ随ヒ増撰スル事有ベシ

一 ⑬当分の内、「水の音」月次集点料配当セズ、是ヲ積立置、教会所設置の資金ニスベキ事

- 一 ⑭式ヶ月投吟無之者ハ休社トシテ、題紙の載名削除スベシ
「(十二丁ウ)」
- 一 ⑮清書認方ハ相当の筆耕料ヲ以座申ベキ事
- 一 ⑯投吟料ハ差句封ニ相添可申。地方ニヨリ不便理の者ハ郵便切手封入スルモ苦シカラズ
- 一 ⑰客評ハ式名宛、毎月、題紙ニ記載スベシ
「(十三丁オ)」
- 一 ⑱月次集題ハ教長ニテ作スベシ
「(十三丁ウ)」
- 一 開卷或ハ集会席オイテ、不品行ナル形体有之間敷事
「(十三丁ウ)」

八月

注

- (1) 「桑弧集」四編(明治二十三年春頃刊)の青松庵飛猿序に「諸吟詠物の起律を参酌して作法・批評・撰題等、総て精微な社論があり、ますゆゑ」とあるので、若葉家志計留による「清警冠句」の作法書は、この頃までにはまとめられたと推測できる。
- (2) 「明治期の俳文芸意識の魁——東京「清警冠句」と狂俳——」(『東海近世』18 東海近世文学会 二〇〇九年三月発行予定)・「東京 桑弧社のめざした「清警冠句」(『社会とマネジメント』6・2 二〇〇九年三月)
- (3) 稲葉正邦(一八三四—一八九八)は、淀藩主で、江戸幕府の所司代・老中を歴任し、明治には淀藩知事に就き、その後、教派神道の一派としての神道本局の初代管長となった人物である。教導職には、明治五年八月九日に中教正に任じられ、同六年十一月四日に権大教正、同八年三月三十日には大教正に任じられた。(『日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(吉川弘文館 一九八一年)、井上順孝・阪本是丸編著『日本型政教関係の誕生』(第一書房 一九八七年)参照。)

(4) 『尾張狂俳の研究』(勉誠出版 二〇〇八年) 第三部第一章「水の音」「狂俳」「自由塔」と「樗流」 三二三頁。なお、三
一三頁後ろから二行目で、「清原集」を十一月創刊と記載するが、十月と訂正する。

(5) 安城市 吉沢義夫氏蔵。

(6) 注4と同書 第三部第二章『俳諧皇国俳人全摘集』三五一頁

(7) 架蔵。

(8) 注4と同書 三一五頁

(9) 「水の音」をすべて見ていないが、見ることできたもののその角書は、以下のとおり。初編から三四編(明治十八年三
月)までは「狂俳」、四一編から九三編(同二十四年)まで「俳諧単句」、一〇七編(同二十六年一月)から「俳諧冠句」が
使われ、その後、「水の音拾遺 富艸集」(同三十五年十一月)から「俳諧単句」と「俳諧冠句」を併用するようになる。

(10) 注4と同書 第一部第一章「三名古屋の愛好者の俳諧意識」一一一頁・第二章「二 樗良始祖説と撰句基準」「元祖無為
庵遺訓」 一四一頁

(11) 注4と同書 第三部第三章『狂俳眠りざまし』『この花集』『類題花の魁』 三九一頁

〔付記〕貴重な資料をご提供いただきました安城市の吉沢義夫氏には、心より謝意を表します。更に、鈴木勝忠先生
宅での研究会(通称、寺子屋)、大阪俳文学研究会二月例会での口頭発表において、貴重なご教示をいただきま
したこと、心より謝意を表します。

本稿は、平成二十年度文部科学省科学研究費補助金〔基盤研究(C) 課題番号…一八五二〇一四一〕による
研究成果の一部である。